研究ノート

看護学生の実習適応感に関する研究（第４報）

――愛着パターン別実習適応感の特徴――

柴田和恵[1)]・高橋ゆかり[1)]・鹿村眞理子[1)]

Study of practice adjustment in nursing students (Part 4)

――Features of practice adjustment by attachment pattern――

Kazue SHIBATA[1)], Yukari TAKAHASHI[1)], Mariko SHIKAMURA[1)]

Ⅰ．はじめに

看護においては、対象のニーズに沿った看護ケアを提供するという看護実践能力が求められている。そのため、看護学の基礎教育における臨地実習（以下「実習」という）は、重要な位置を占めている。

我々は、実習の成否の鍵を握るものの一つに、実習適応感があると考え、第１報[1)]で実習適応感尺度を作成し、信頼性･妥当性の検証を行った。また、第２報[2)]では、対人関係能力である社会的スキルを獲得している者、また、職業に対する意識すなわち職業未決定が低い者ほど実習適応感が高く、さらに愛着理論に基づく個人特有の対人関係を判断する枠組み（内的作業モデル）との関連では、他者との安定した信頼関係を築く者ほど実習適応感が高いという結果を得た。一方、他者との深いつきあいを求める一方でその関係性に確信がもちにくい者は、実習適応感が低く、学年比較では、２年生で職業未決定の下位尺度「猶予」で関連がなかった等も報告した。更に第３報[3)]では、実習適応感の影響要因である社会的スキルおよび職業未決定について重回帰分析を行い、実習適応感への影響度を明らかにすると共に学年比較を行った。その結果、全対象および２年生、３年生での影響度すなわち影響要因の数や強さの特徴を明らかにした。ところで、Bowlby[4)~6)]は、愛着の問題を乳幼児期に限らず生涯発達の問題と捉え、青年期や成人期における対人的経験や対人的行動を規定するものとして、内的作業モデルを構成した。これは、いわゆる個人特性として実習適応感との関連があることは第２報でも明らかにしている。しかし、その愛着パターン別に実習適応感にどのような影響要因の違いがあるのかを明らかにすることは、個人の特性を踏まえた個別的指導の重要な基礎資料に成り得るものと考える。

そこで本研究では、今後の実習指導への示唆を得るために、個人特性としての内的作業モデルによる愛着パターン別に、実習適応感の影響要因である社会的スキルと職業未決定について、実習適応感への影響度を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ．研究方法

１．調査対象者

基礎看護学実習Ⅱを終えたＡ看護系短期大学２年生の82名と実習がすべて終了している３年生72名を対象とした。

２．調査時期・方法

調査は、いずれの学年も実習終了後の2005年９月～11月に集団調査法で実施した。

３．調査用紙の構成

(1) 実習適応感

高橋らが第１報で作成し、一定の信頼性と妥当性が検証された実習適応感尺度を用いた（資料１）[1)]。本尺度は、【取り組み姿勢】【自己評価】【学習準備状況】【基本的信頼感】の４因子から構成され、21項目からなる。

１）群馬パース大学保健科学部看護学科

評定は5件法で、得点が高いほど実習に対する適応感が高いことを示している。

(2) 社会的スキル

菊地が作成した対人関係能力の測定用具である「Kiss-18 (Kikuchi's Social Skill Scale•18項目版)」[7]を用いた(資料2)。本尺度は、「初歩的なスキル」、「高度のスキル」、「感情処理のスキル」、「攻撃に代わるスキル」、「ストレスを処理するスキル」、「計画のスキル」の6因子で構成され、各因子3項目で合計18項目からなる。評定は5件法で、得点が高いほど社会的スキル能力の認知が高いことを示している。

(3) 職業未決定

職業未決定の状態を測定するために下山が開発し、信頼性・妥当性の検証がされている職業未決定尺度[8]を用いた(資料3)。本尺度は、「未熟」、「混乱」、「猶予」、「模索」、「安直」の5因子から構成され、34項目からなる。評定は3件法で、得点が高いほど職業未決定の状態であることを示している。

(4) 内的作業モデル

戸田によって開発され、信頼性・妥当性は確保されている内的作業モデル尺度[9]を用いた(資料4)。本尺度は、幼児期の愛着パターンで分類され、〈安定型〉・〈回避型〉・〈アンビバレント型〉の3因子で構成され、各因子6項目で合計18項目からなる。評定は6件法で、得点が高いほどその特徴を示している。

4. 分析方法

愛着パターン別に各尺度得点および下位尺度得点を一元配置の分散分析を行い、その後の多重比較はScheffeを用いた。また、愛着パターン別に実習適応感とその下位尺度を目的変数とし、その他の下位尺度を説明変数として重回帰分析(強制投入)を行った。統計処理には、SPSS 11.5J for Windowsを用いた。

5. 倫理的配慮

学生には、文書と口頭で研究の趣旨と参加は自由意志で中途辞退も可能である事、無記名調査で個人が特定されない事、参加の有無が成績に影響しない事を保証した。尚、本研究は、本学研究倫理委員会の審査を経て実施したものである。

6. 用語の定義

適応感:適応とは「人と環境との良い調和・平衡状態における人格の状態」であり、人と環境に適応し、目標を達成しようとする行動や意識

実習適応感:臨地実習への積極的かつ主体的な目標達成行動や意識

社会的スキル:対人関係を円滑に運ぶために役立つ技能・能力

職業未決定:職業選択に対して決定できない状態で、積極的な職業模索状態から消極的アパシー(無気力)状態までを含む

内的作業モデル:個人特有の対人関係を判断する枠組み

III. 結　　果

2年生82名中79名から回答が得られ(回収率96.3%)、有効回答75名(有効回答率91.5%)と、3年生は72名中65名から回答が得られ、回収率90.3%、有効回答率100%で合計140名を分析対象とした。また、項目間の比較を可能にするため、それぞれの項目数で割ったものを尺度得点ならびに下位尺度得点とした。

1. 愛着パターン別尺度得点比較(表1)

愛着のパターンは、内的作業モデル尺度で3つの下位尺度得点を求め、最も得点の高い尺度をその対象の特性と捉えた。その結果、〈安定型〉70名、〈アンビバレント型〉51名、〈回避型〉13名〈混合型〉6名の4分類され、下位尺度で複数同得点を示し〈混合型〉に分類された6名は分析から除外した。それぞれの割合は、〈安定型〉52.2%、〈アンビバレント型〉38.1%、〈回避型〉9.7%であった。

実習適応感は、〈安定型〉3.64±0.48点、〈アンビバレント型〉3.14±0.39点、〈回避型〉3.29±0.43点であった。〈安定型〉が、〈アンビバレント型〉($p<0.001$)および〈回避型〉($p<0.05$)に比べて有意に高得点を示した。また、実習適応感の下位尺度をみてみると、【取り組み姿勢】・【自己評価】・【学習準備状況】の3つで、〈安定型〉が、〈アンビバレント型〉より有意($p<0.001$)に高得点を示し、【基本的信頼感】でも〈安定型〉が、〈アンビバレント型〉($p<0.001$)および〈回避型〉($p<0.001$)に比べて有意に高得点を示していた。

社会的スキルは、〈安定型〉3.60±0.43点、〈アンビバレント型〉3.01±0.52点、〈回避型〉3.18±0.21点であった。〈安定型〉は、〈アンビバレント型〉($p<0.001$)および〈回避型〉($p<0.01$)に比べて有意に高得点を

表1 愛着パターン別各尺度得点の比較

N	全体 134		安定型 70		アンビバレント型 51		回避型 13		多重比較（Scheffe）
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
実習適応感	3.41	0.50	3.64	0.48	3.14	0.39	3.29	0.43	＊＊＊：安定型＞アンビバレント型 ＊：安定型＞回避型
取り組み姿勢	3.92	0.56	4.11	0.54	3.68	0.50	3.77	0.53	＊＊＊：安定型＞アンビバレント型
自己評価	3.06	0.74	3.27	0.72	2.74	0.68	3.23	0.63	＊＊＊：安定型＞アンビバレント型
学習準備状況	3.19	0.66	3.41	0.62	2.91	0.63	3.14	0.52	＊＊＊：安定型＞アンビバレント型
基本的信頼感	3.46	0.71	3.75	0.66	3.23	0.63	2.83	0.55	＊＊＊：安定型＞アンビバレント型 ＊＊＊：安定型＞回避型
社会的スキル	3.34	0.53	3.60	0.43	3.01	0.52	3.18	0.21	＊＊＊：安定型＞アンビバレント型 ＊＊：安定型＞回避型
初歩的なスキル	3.43	0.78	3.83	0.54	3.03	0.83	2.85	0.48	＊＊＊：安定型＞アンビバレント型 ＊＊＊：安定型＞回避型
高度のスキル	3.52	0.67	3.82	0.59	3.16	0.62	3.31	0.52	＊＊＊：安定型＞アンビバレント型 ＊：安定型＞回避型
感情処理のスキル	3.27	0.65	3.53	0.59	2.92	0.61	3.23	0.46	＊＊＊：安定型＞アンビバレント型
攻撃に代わるスキル	3.29	0.69	3.57	0.55	2.95	0.75	3.08	0.39	＊＊＊：安定型＞アンビバレント型 ＊：安定型＞回避型
ストレスを対処するスキル	3.27	0.62	3.40	0.58	3.10	0.66	3.21	0.60	＊：安定型＞アンビバレント型
計画のスキル	3.24	0.72	3.45	0.61	2.91	0.72	3.38	0.80	＊＊＊：安定型＞アンビバレント型
職業未決定	1.62	0.39	1.47	0.36	1.79	0.35	1.79	0.31	＊＊＊：安定型＜アンビバレント型 ＊：安定型＜回避型
未　熟	1.55	0.53	1.31	0.39	1.81	0.54	1.77	0.52	＊＊＊：安定型＜アンビバレント型 ＊＊：安定型＜回避型
混　乱	1.77	0.53	1.55	0.50	2.04	0.46	1.87	0.39	＊＊＊：安定型＜アンビバレント型
猶　予	1.36	0.39	1.26	0.36	1.43	0.41	1.58	0.39	＊：安定型＜回避型
模　索	1.84	0.55	1.74	0.58	1.94	0.51	1.94	0.45	
安　直	1.59	0.37	1.48	0.35	1.70	0.37	1.80	0.32	＊＊：安定型＜アンビバレント型 ＊：安定型＜回避型

＊＊＊：P＜0.001，＊＊：P＜0.01，＊：P＜0.05

示した。また、社会的スキルの下位尺度をみてみると、「初歩的なスキル」・「高度のスキル」・「攻撃に代わるスキル」の3つは、いずれも〈安定型〉が、〈アンビバレント型〉（p＜0.001）と〈回避型〉「初歩的なスキル」（p＜0.001）、「高度のスキル」・「攻撃に代わるスキル」（p＜0.05）より有意に高得点を示した。また、「感情処理のスキル」・「ストレスを対処するスキル」・「計画のスキル」の3つにおいては、〈安定型〉が、〈アンビバレント型〉「情報処理のスキル」・「計画スキル」（p＜0.001）、「ストレスを対処するスキル」（p＜0.05）より有意に高得点を示した。

職業未決定は、〈安定型〉1.47±0.36点、〈アンビバレント型〉1.79±0.35点、〈回避型〉1.79±0.31点であった。〈安定型〉は、〈アンビバレント型〉（p＜0.001）および〈回避型〉（p＜0.05）より有意に低得点を示した。また、下位尺度をみてみると、「未熟」では、〈安定型〉が〈アンビバレント型〉（p＜0.001）および〈回避型〉（p＜0.01）より有意に低得点を示し、「安直」でも〈安定型〉が、〈アンビバレント型〉（p＜0.01）および〈回避型〉（p＜0.05）より有意に低得点を示した。又、「混乱」では、〈安定型〉が、〈アンビバレント型〉より有意（p＜0.001）に低得点で、「猶予」では、〈安定型〉が、〈回避型〉より有意（p＜0.05）に低得点であった。「模索」では有意差は認められなかった。

2．愛着パターン別実習適応感の影響要因

〈安定型〉では、実習適応感は、いずれの下位尺度の影響も認められなかった。また、図1－1に示すように下位尺度をみてみると、【取り組み姿勢】では、有意な影響は認められなかった。しかし、【自己評価】（R^2＝0.40）は、職業未決定の「混乱」（β＝－0.42, p＜0.05）に負の影響を認め、【学習準備状況】（R^2＝0.34）では、社会的スキルの「計画のスキル」（β＝0.35, p＜0.05）に正の影響を認めた。また、【基本的信頼感】

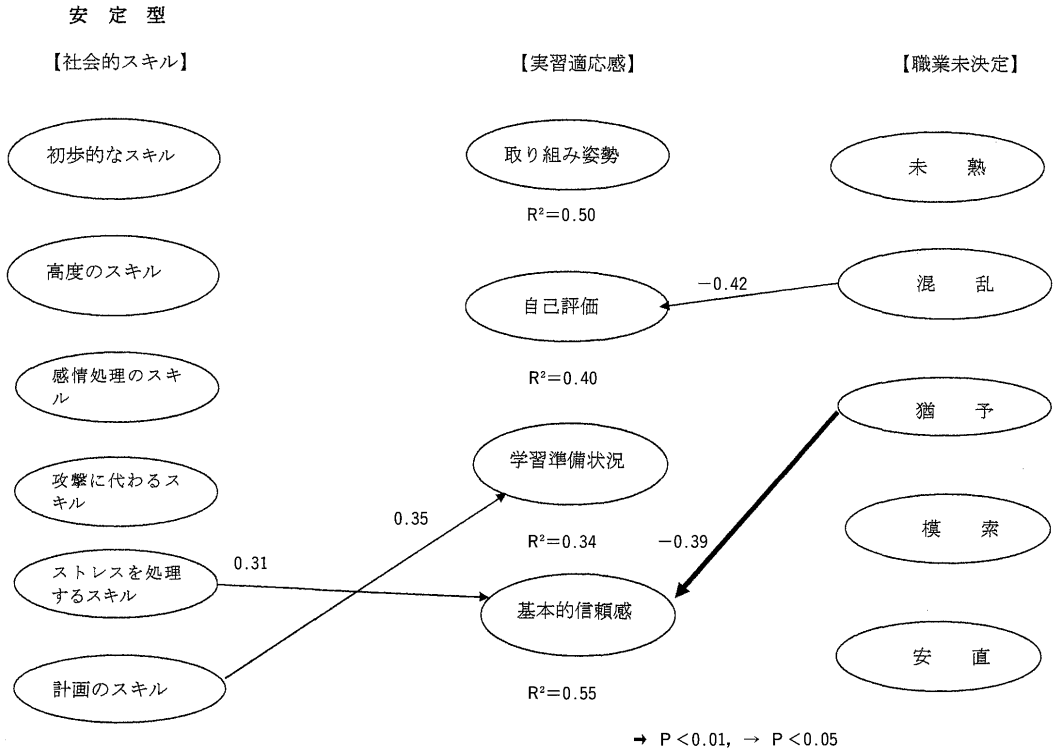

図1－1　愛着パターン別実習適応感の影響要因

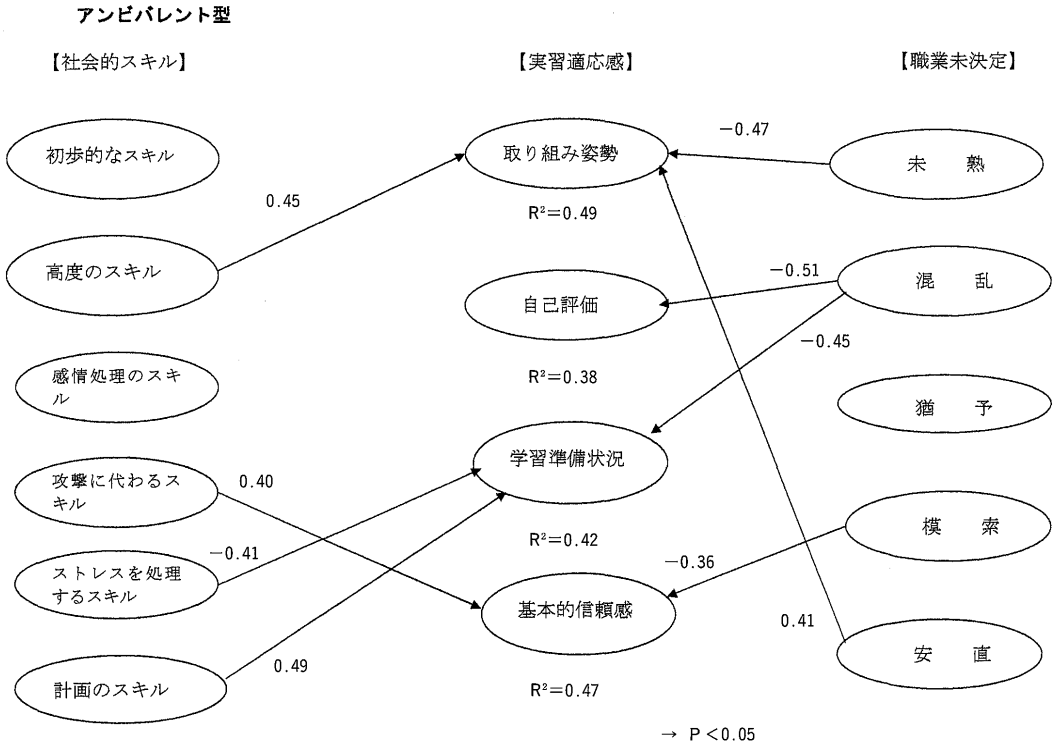

図1－2　愛着パターン別実習適応感の影響要因

（$R^2=0.55$）では、社会的スキルの「ストレスを処理するスキル」（$\beta=0.31$，$p<0.05$）に正の影響を認め、職業未決定の「猶予」（$\beta=-0.39$，$p<0.01$）とは負の影響を認め、それぞれ有意な予測子となっていた。

〈アンビバレント型〉では、実習適応感は、職業未決定の「混乱」（$\beta=-0.49$，$p<0.01$）に負の影響を認

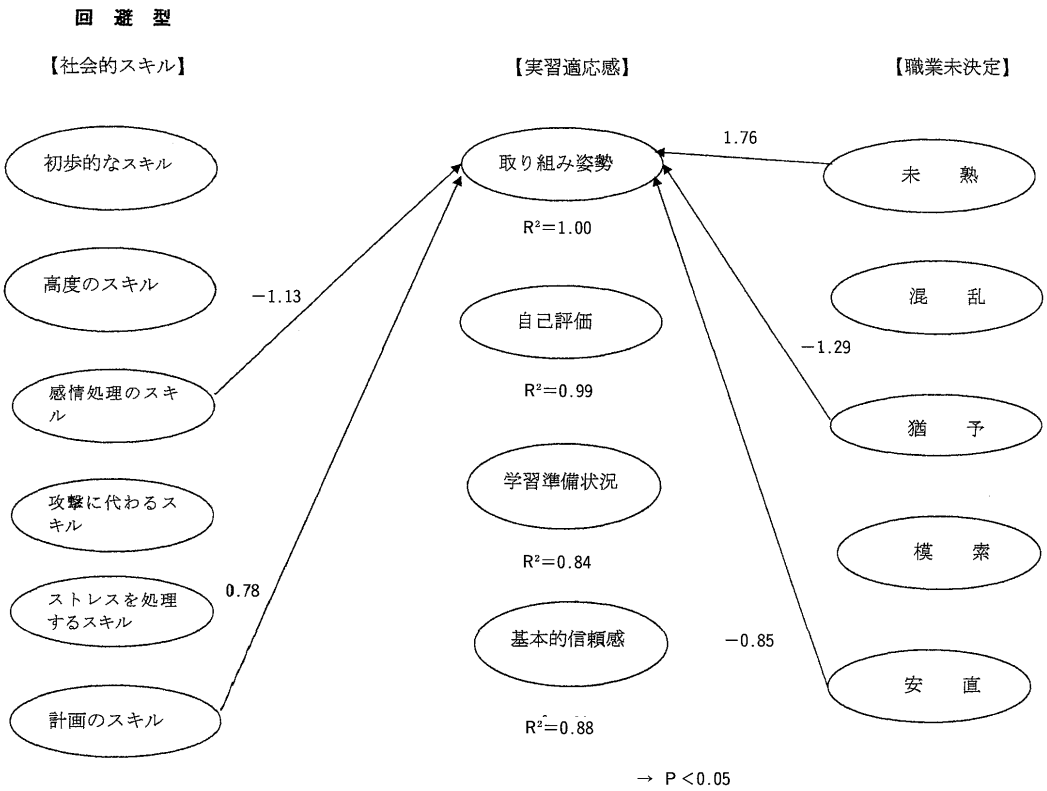

図1－3 愛着パターン別実習適応感の影響要因

めた。また、図1－2に示すように下位尺度をみてみると、【取り組み姿勢】(R^2=0.49)で、社会的スキルの「高度のスキル」(β=0.42, $p<0.05$)および職業未決定の「安直」(β=−0.41, $p<0.05$)に正の影響を認めた。また、「未熟」(β=−0.47, $p<0.05$)とは負の影響を認めた。さらに、【自己評価】(R^2=0.38)では、職業未決定の「混乱」(β=−0.51, $p<0.05$)に負の影響が認められた。【学習準備状況】(R^2=0.42)では、社会的スキルの「計画のスキル」(β=0.49, $p<0.05$)に正の影響を認め、「ストレスを対処するスキル」(β=−0.41, $p<0.05$)および職業未決定の「混乱」(β=−0.45, $p<0.05$)とは負の影響を認めた。【基本的信頼感】(R^2=0.47)では、社会的スキルの「攻撃に代わるスキル」(β=0.40, $p<0.05$)および職業未決定の「模索」(β=0.36, $p<0.05$)に正の影響を認め、それぞれ有意な予測子となっていた。

〈回避型〉では、実習適応感は、社会的スキルの「計画のスキル」(β=0.84, $p<0.05$)および職業未決定の「模索」(β=0.84, $p<0.05$)に正の影響を認めた。また、社会的スキルの「感情処理のスキル」(β=−0.63, $p<0.05$)および職業未決定の「安直」(β=−0.54, $p<0.05$)とは負の影響を認めた。図1-3に示すように、次に下位尺度をみてみると、唯一【取り組み姿勢】(R^2=1.00)だけが、社会的スキルの「計画のスキル」(β=0.78, $p<0.05$)と職業未決定の「未熟」(β=1.76, $p<0.05$)に正の影響を認め、社会的スキルの「感情処理のスキル」(β=−1.13, $p<0.05$)と職業未決定の「猶予」(β=−1.29, $p<0.05$)と「安直」(β=−0.85, $p<0.05$)とは負の影響を認め、それぞれ有意な予測子となっていた。

Ⅳ. 考　　察

1. 愛着パターン別尺度得点の特徴

愛着パターンは、他者との安定した信頼関係を築く〈安定型〉、他者との深いつきあいを求める一方でその関係性に確信をもちにくい〈アンビバレント型〉、他者との深いつきあいを自ら避ける〈回避型〉に分類され[10]、今回の対象は、約半分が〈安定型〉で、4割が〈アンビバレント型〉、残り1割弱が〈回避型〉であった。すなわち、他者との関係性を苦手とし、避けるような者は少ないことが示唆された。

次に、実習適応感を愛着パターン別にみてみると、〈安定型〉が最も実習適応感が高く、次いで〈回避型〉、

〈アンビバレント型〉という順になっていた。これは、個人の適応感を捉えようとするとき、その人の自己意識において自分なりにまとまりがあり安定していると感じられているか（人格内部の状態に対する適応感）と他者や外界へ働きかけ前進していこうとする自分が感じられているか（まさに行動しつつあるときその外へ向かう動きに関する適応感）の2側面があると報告されているが[11]、他者との安定した信頼関係を築ける〈安定型〉は、その人格内部の状態に対する適応感が高くなり、それが得点に反映されていたと考えられる。

社会的スキルを愛着パターン別にみてみると、〈安定型〉・〈回避型〉・〈アンビバレント型〉の順で得点が高かった。これは、社会的スキル得点の高い人ほど、対人に積極的に関わるという報告[12]があり、他者との関わりを回避する〈回避型〉や、深いつきあいを求める一方でその関係性に確信を持ちにくい〈アンビバレント型〉が低いのは妥当な結果と考える。

職業未決定を愛着パターン別でみてみると、〈アンビバレント型〉と〈回避型〉がほぼ同得点で、〈安定型〉が有意に低かった。この結果からは、安定した信頼関係を築く者の方が、その安定した関係性の中で、積極的に職業決定を行っているものと思われる。

2．愛着パターン別実習適応感への影響要因

〈安定型〉の実習適応感全体では、有意な影響要因は認められなかったが、下位尺度で最も影響を強く受けていたのは【基本的信頼感】で、「ストレスを処理するスキル」を獲得している者ほど、教員やグループメンバーの精神的サポートの信頼感が高い傾向が伺えた。藤野ら[12]は、ストレス対処のスキルは、ストレスへの耐性を高め、同時にストレスを緩和・低減することが必要であり、自分を非難する相手の話を聞き、非難される理由を考えるなどの方法を実行すると述べており、このように相手を受け入れ、理解しようという姿勢が他者との安定した信頼関係を築く〈安定型〉の特徴と重なり、信頼感を高めていたと思われる。また、職業未決定の「猶予」が低いほど、教員やメンバーの精神的サポートの信頼感が高い傾向が強かった。これは、他者との安定した信頼関係を築ける者の集団では、他者との信頼感を基盤に職業について猶予することなく決定、方向づけてきていることが伺える。次に、【自己評価】では、職業未決定の「混乱」にあるほど否定的自己評価をする傾向があった。若林ら[13]は、職業レディネスが高い者ほど、志向性も自己評価も高く、力強い自己のイメージをもつと報告している。したがって、職業決定について不安定で不十分な準備状況にある者は、おのずと自己評価も低くなっていると思われる。また、【学習準備状況】では、「計画のスキル」を獲得しているほど、学習準備が整っている傾向があり、計画性のある者は、事前の学習準備状況も高いことが予測され、妥当な結果と解釈できる。

〈アンビバレント型〉の実習適応感全体では、職業未決定の「混乱」傾向が強い者ほど、実習適応感が低い傾向が示唆された。下山[14]は、職業決定の際、混乱が強いほど、自分の確立すなわち、アイデンティティの未確立が生じると述べている。また、吉永ら[15]は、看護学生の実習適応感と自我同一性の間にはかなりの相関があるとも報告している。したがって、職業決定の際に混乱傾向の者は、アイデンティティの確立が未熟で、実習適応感も低いということが考えられる。さらに、矢野[10]は、〈アンビバレント型〉と不安に有意な正の相関を認め、山岸[16]は、〈アンビバレント型〉では、対人的な不安と自信のなさ、また、対人的なことに限らず、より一般的に自信が持てない、自分を受容できないという傾向があるとも報告している。今回、愛着パターンで分類したことによって、元来不安と自信のなさを感じている集団の中で、より職業決定の際に混乱傾向が強い者は、不安が強調される形となり、実習への適応が困難になっているものと考える。次に、実習適応感の下位尺度をみてみると、多くの影響を受けていたのは【取り組み姿勢】と【学習準備状況】であった。【取り組み姿勢】では、職業未決定の「未熟」の傾向が強い者ほど、実習への取り組み姿勢が低く、「高度なスキル」をもつ者ほど、実習への取り組み姿勢が高い傾向が示唆された。一方、職業決定の際に安易な職業決定をする者が、積極的に実習に取り組む姿勢が高い傾向があった。これは、看護教育機関への入学時から将来がほぼ決定しており、深く考えることなく職業決定しているのと同様に、その資格獲得のために必要な実習に取り組むのも当然という認識が〈アンビバレント型〉のような不安定な集団に多く見られていることが示唆された。次に【学習準備状況】では、「計画のスキル」の獲得している者や職業未決定の「混乱」が少ない者ほど、学習準備が整い、「ストレスを処理するスキル」の少ない者ほど、学習準備が不十分という傾向が示された。このように解釈が難しい状態が〈アンビバレント型〉の特徴とも考える。さらに、【基本的信頼感】では、「攻撃に代わるスキル」獲得の不十分な者

や職業決定の「模索」状況にない者ほど、教員やメンバーへの精神的サポートの信頼感が高かった。これは、他者とのトラブル対処の機会が少なくその能力が低いということは、円滑な関係が築けており、基本的信頼も高いとも解釈できる。【自己評価】では、〈安定型〉の特徴と同様の結果が示唆された。

〈回避型〉の実習適応感全体では、「計画のスキル」の獲得者や、職業決定の際安易に決定せず、積極的に模索する者ほど、実習適応感が高く、「感情処理のスキル」の未獲得者ほど、実習適応感が高い傾向も示唆された。次に、下位尺度をみてみると、【取り組み姿勢】に集中して影響を受けており、計画的な能力を持つ者と「未熟」で職業決定できないあるいは猶予状態にない者ほど実習への取り組み姿勢が高く、「感情処理のスキル」が不十分な者ほど、積極的な取り組み姿勢を示していた。〈回避型〉は、他者は拒否的で援助が期待できないことから、これを補完するためにきわめて自己充足的な存在という自己に関する表象を持つと報告されている[9]。すなわち、自己の感情を必要以上に抑えて、他者との関係性を持たずに自閉的になっているが、他者からの援助は期待できないため、自己充足していこうという姿勢が強いため、計画能力が高く、じっくり考えて職業決定しようとするためにも積極的に取り組もうという姿勢が現れているものと考える。

V．結　　論

1．今回の対象の愛着パターンは、5割が〈安定型〉で、4割が〈アンビバレント型〉、1割が〈回避型〉で、実習適応感は、〈安定型〉〈回避型〉〈アンビバレント型〉の順に高かった。

2．〈安定型〉は、実習適応感全体では有意な影響要因は認められなかったが、下位尺度【基本的信頼】で職業未決定の「猶予」と強い負の影響が認められた。

3．〈アンビバレント型〉は、下位尺度全てに1～3要因の影響を受け、その解釈に矛盾するのが特徴であった。

4．〈回避型〉は、実習適応感全体に社会的スキルの「計画のスキル」と職業未決定の「模索」に正の影響を受け、社会的スキルの「感情処理のスキル」と職業未決定の「安直」と負の影響を認めた。また、下位尺度では【取り組み姿勢】だけが、社会的スキルの「計画のスキル」と職業未決定の「未熟」から正の影響を受け、社会的スキルの「感情処理のスキル」と職業未決定の「猶予」・「安直」に負の影響を受けていた。

Ⅵ．研究の限界と今後の課題

今回の調査は、愛着パターン毎に分けてその特徴を明らかにしたが、母集団の不足があるため結果の一般には限界がある。今後、他大学等で対象数を増やし、学年や愛着パターンの違いで交互作用等の影響を受けていないかどうかなどを明らかにすることが検討課題である。

引　用　文　献

1）高橋ゆかり・柴田和恵・鹿村眞理子：看護学生の実習適応に関する研究(第1報)－尺度作成の試みと信頼性・妥当性の検討－．群馬パース大学紀要第2号掲載予定

2）柴田和恵・高橋ゆかり・鹿村眞理子：看護学生の実習適応に関する研究(第2報)－実習適応感と関連要因の学年比較－．群馬パース大学紀要第2号掲載予定

3）高橋ゆかり・柴田和恵・鹿村眞理子：看護学生の実習適応に関する研究(第3報)－実習適応感に影響を与える要因の分析－．群馬パース大学紀要第2号掲載予定

4）Bowlby, J. 1969　Attachment and loss: Vol. 1 Attachment.　New York Basic Books.（黒田実郎他訳 1976　母子関係の理論1：愛着行動　岩崎学術出版社）

5）Bowlby, J. 1973　Attachment and loss: Vol. 2 Attachment.　New York Basic Books.（黒田実郎他訳 1977　母子関係の理論2：分離不安　岩崎学術出版社）

6）Bowlby, J. 1973　Attachment and loss: Vol. 3 Attachment.　New York Basic Books.（黒田実郎他訳 1981　母子関係の理論3：愛情喪失　岩崎学術出版社）

7）堀　洋道監修・吉田冨二雄編：心理測定尺度集Ⅱ—人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉．サイエンス社、東京：2001：p170-174.

8）堀　洋道監修・吉田冨二雄編：心理測定尺度集Ⅱ—人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉．サイエンス社、東京：2001：p345-350.

9）堀　洋道監修・吉田冨二雄編：心理測定尺度集II—人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉．サイエンス社、東京：2001：p109-117.
10）矢野由佳子：短大生の対人態度と不安—内的作業モデルと特性不安空の検討—．東京成徳短期大学紀要　36：2003：19-26.
11）広瀬美弥子：適応についての一研究－自己意識との関連において－．名古屋大学教育心理学専攻修士学位論文概要　1976：223-224.
12）藤野ユリ子・室屋和子・佐藤一美：看護系大学四年生の学生生活や対人関係に関する認識と社会的スキル．産業医科大学雑誌　27(3)：2005：263-272.
13）若林　満・後藤宗理・鹿内啓子：職業レディネスと職業選択の構造．名古屋大学教育学部紀要　30：1983：63-98.
14）下山晴彦：大学生の職業未決定の研究．教育心理学研究　34(1)：1986：20-30.
15）吉永喜久恵・大沢正子・高橋　光：看護学生の自我同一性と実習適応感．神戸市立看護短期大学紀要　8(8)：1989：67-80.
16）山岸明子：内的作業モデル尺度の構造と4時点での変動－女子看護短大生を対象として－．順天堂医療短期大学紀要　11：2000：41-50.

資料1　実習適応感尺度

実習についてお伺いします。 最もあてはまる番号に○をつけて下さい。	非常によくあてはまる	少しあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1　これから看護を行っていく上で自信がついてきている	5	4	3	2	1
2　明確な目的がないと患者を訪室しにくい方だ	5	4	3	2	1
3　わからないことは病棟看護師によく聞いている	5	4	3	2	1
4　実習では、何からしていいのか見えなくて焦ってしまう方である	5	4	3	2	1
5　実習記録の内容が充実するよう努めている	5	4	3	2	1
6　何でも相談できるグループメンバーがいる	5	4	3	2	1
7　病棟の日課に合わせて計画をたて、行動ができるように努めている	5	4	3	2	1
8　看護師は私の性分にあっていると思う	5	4	3	2	1
9　実習中の些細な失敗でも落ち込んでしまう方である	5	4	3	2	1
10　事前学習や自己学習を十分行い実習している	5	4	3	2	1
11　他の実習グループがうらやましいと思う	5	4	3	2	1
12　実習場所を離れる時は、所在を明らかにするように努めている	5	4	3	2	1
13　看護は有意義な仕事であると実感している	5	4	3	2	1
14　実習到達目標に向けて努力している	5	4	3	2	1
15　実習に必要な知識を充分に持っている	5	4	3	2	1
16　カンファレンスで安心して自由に発言している	5	4	3	2	1
17　学内に何でも相談できる教員がいる	5	4	3	2	1
18　指導者および学生同士、適切な言葉遣いができるように努めている	5	4	3	2	1
19　勉強不足のまま実習を行っている	5	4	3	2	1
20　カンファレンスでメンバーから助言や質問されると嫌だと感じる	5	4	3	2	1
21　病棟看護師とよい人間関係がとれるように努めている	5	4	3	2	1

資料2　社会的スキル尺度

人との関わりについてお伺しいます。 最もあてはまる番号に○をして下さい。	いつもそうだ	たいていそうだ	どちらともいえない	たいていそうでない	いつもそうでない
1　他人と話していて、あまり会話が途切れない方ですか	5	4	3	2	1
2　他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか	5	4	3	2	1
3　他人を助けることを上手にやれますか	5	4	3	2	1
4　相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか	5	4	3	2	1
5　知らない人とでも、すぐに会話がはじめられますか	5	4	3	2	1
6　まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか	5	4	3	2	1
7　こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか	5	4	3	2	1
8　気まずいことがあった相手と上手に和解できますか	5	4	3	2	1
9　仕事をする時に何をどうやったらよいか決められますか	5	4	3	2	1
10　他人が話しているところに、気軽に参加できますか	5	4	3	2	1
11　相手から非難された時にも、それをうまく片付けることができますか	5	4	3	2	1
12　仕事の上でどこに問題があるかすぐに見つけることができますか	5	4	3	2	1
13　自分の感情や気持ちを素直に表現できますか	5	4	3	2	1
14　あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか	5	4	3	2	1
15　初対面の人に自己紹介が上手にできますか	5	4	3	2	1
16　何か失敗した時に、すぐに謝ることができますか	5	4	3	2	1
17　まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていても、うまくやっていけますか	5	4	3	2	1
18　仕事の目標をたてるのに、あまり困難を感じないほうですか	5	4	3	2	1

資料3　職業未決定尺度

職業についてお伺いします。 最もあてはまる番号に○をつけて下さい。		あてはまる	どちらともいえない	あてはまらない
1	自分の将来の職業については、何を基準にして考えたらよいかわからない	3	2	1
2	せっかく大学に入ったのだから、今は職業のことは考えたくない	3	2	1
3	できることなら職業決定は、先に延ばし続けておきたい	3	2	1
4	望む職業につけないのではと不安になる	3	2	1
5	将来、やってみたい職業がいくつかあり、それらについていろいろ考えている	3	2	1
6	生活が安定するなら、職業の種類はどのようなものでもよい	3	2	1
7	自分がどのような職業に適しているのかわからない	3	2	1
8	職業決定といわれても、まだ先のことのようでピンとこない	3	2	1
9	将来自分が働いている姿が全く思い浮かばない	3	2	1
10	職業決定のことを考えると、とてもあせりを感じる	3	2	1
11	職業を最終的に決定するのはまだ先のことであり、今はいろいろなことを経験してみる時期だと思う	3	2	1
12	自分を採用してくれる所なら、どのような職業でもよいと思っている	3	2	1
13	自分の職業については、いろいろ計画を立てるが、一貫性がなく、次々に変化していく	3	2	1
14	自分の知っている職業の中で、やりたいと思う職業がみつからない	3	2	1
15	これまで、自分で決定するという経験が少なく、職業決定のことを考えると不安になる	3	2	1
16	職業に関する情報がまだ充分にないので、情報を集めてから決定したい	3	2	1
17	できるだけ有名な所に就職したいと思っている	3	2	1
18	誤った職業決定をしてしまうのではないかという不安があり、決定できない	3	2	1
19	私は、いつも自分で実現できないような職業ばかり考えている	3	2	1
20	職業につけたとしても、うまくやっていく自信がない	3	2	1
21	将来の職業のことを考えると気が滅入ってくる	3	2	1
22	将来の職業については、幾つかの職種に絞られてきたが、最終的に一つに決められない	3	2	1
23	自分にとって職業につくことは、それほど重要なことではない	3	2	1
24	自分一人で職業を決める自信がない	3	2	1
25	今の状態では、自分の一生の仕事などみつかりそうもない	3	2	1
26	将来の職業については、考える意欲が全くわかない	3	2	1
27	私は、あらゆるものになれるような気持ちになる時と、何にもなれないのではないかという気持ちになる時がある	3	2	1
28	これだと思う職業が見つかるまでじっくり探していくつもりだ	3	2	1
29	できることなら誰か他の人に自分の職業を決めてもらいたいと思うことがある	3	2	1
30	自分が職業としてどのようなことをやりたいのかわからない	3	2	1
31	職業のことは、最終学年になってから考えるつもりだ	3	2	1
32	できることなら、職業など持たず、いつまでも好きなことをしていたい	3	2	1
33	職業は決まっていないが、今の関心を深めていけば職業につながってくると思う	3	2	1
34	学歴やツテを利用してよい職業につきたい	3	2	1

資料 4　内的作業モデル尺度

	普段のあなたについてお伺いします。 最もあてはまる番号に○をつけて下さい。	非常によくあてはまる	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	全くあてはまらない
1	知り合いができやすい方だ	6	5	4	3	2	1
2	人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある	6	5	4	3	2	1
3	人に頼るのは好きでない	6	5	4	3	2	1
4	すぐに人と親しくなる方だ	6	5	4	3	2	1
5	時々友達が本当は私を好いてくれていないのではないかと、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある	6	5	4	3	2	1
6	人に頼らなくても、自分一人で充分にうまくやっていけると思う	6	5	4	3	2	1
7	人に好かれやすい性質だと思う	6	5	4	3	2	1
8	自分を信用できないことがよくある	6	5	4	3	2	1
9	あまり親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう	6	5	4	3	2	1
10	たいていの人は私のことを好いてくれていると思う	6	5	4	3	2	1
11	あまり自分に自信がもてない方だ	6	5	4	3	2	1
12	あまり人と親しくなるのは好きではない	6	5	4	3	2	1
13	気軽に頼ったり頼られたりすることができる	6	5	4	3	2	1
14	いつも人と一緒にいたがるので、時々人からいやがられてしまう	6	5	4	3	2	1
15	人は全面的には信用できないと思う	6	5	4	3	2	1
16	初めて会った人とでもうまくやっていける自信がある	6	5	4	3	2	1
17	ちょっとしたことで、すぐに自信をなくしてしまう	6	5	4	3	2	1
18	どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう	6	5	4	3	2	1